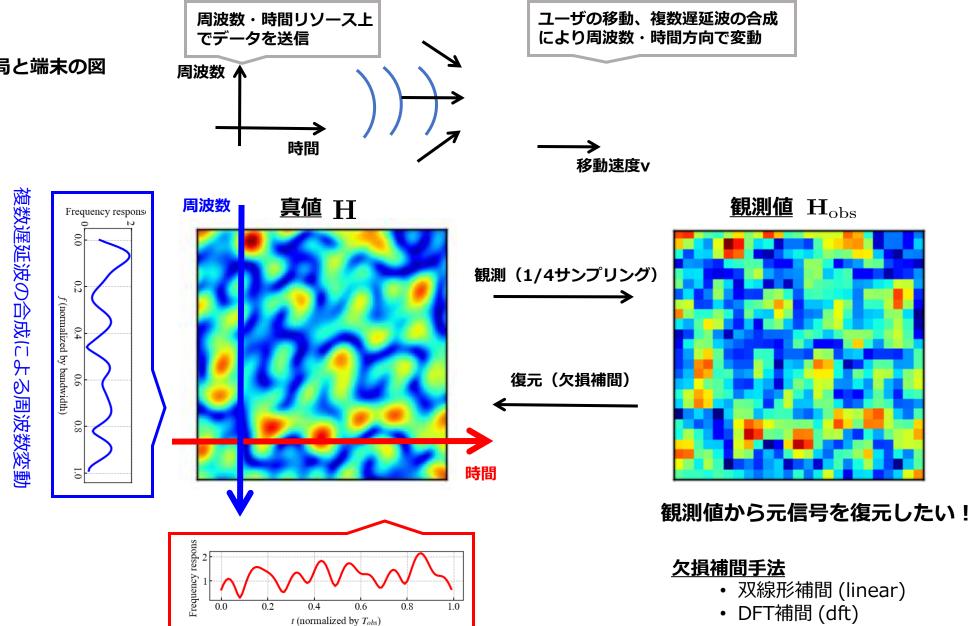


基地局と端末の図

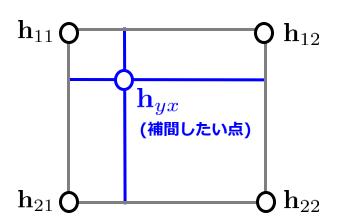


ユーザの移動による時間変動

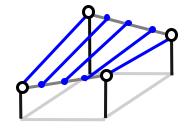
• ガウス過程回帰 (gp)

# 手法

### 双線形補間 (bilinear)



サンプル点間を4点を通る曲面で近似



time

内点  $\mathbf{h}_{yx}$  を近傍の4点  $\{\mathbf{h}_{11},\mathbf{h}_{12},\mathbf{h}_{21},\mathbf{h}_{22}\}$  から補間

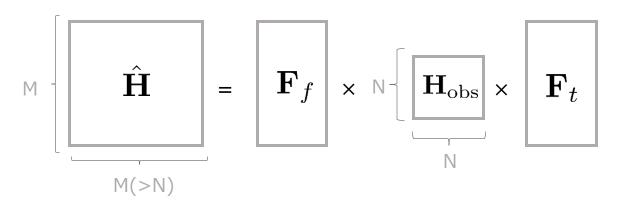
$$\mathbf{h}_{yx} = \underline{c_{11}}\mathbf{h}_{11} + \underline{c_{12}}\mathbf{h}_{12} + \underline{c_{21}}\mathbf{h}_{21} + \underline{c_{22}}\mathbf{h}_{22}$$

結合係数 c は補間点までの近さに基づく指標から決定

# DFT補間 N点DFT N点DFT time time

・ 周波数,時間の2次元に対して適用

frequency



time

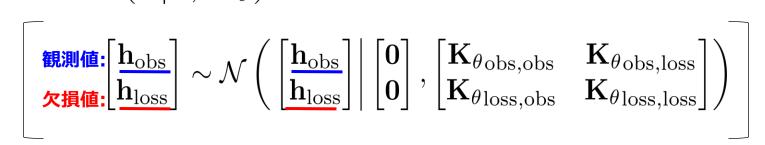
M(>N)点の分解能 の波で再構成

# 手法

#### ガウス過程回帰(GP)

・ 2次元無線チャネルを結合ガウス分布でモデリング

$$\mathbf{h} \sim \mathcal{N}(\mathbf{h}|\mathbf{0}, \mathbf{K}_{ heta})$$



・ パラメータ $\, heta$ の学習(最尤推定)

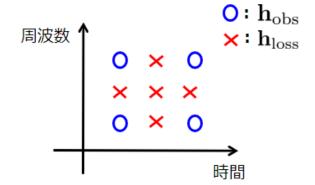
$$\max_{\theta} \ln p_{\theta}(\mathbf{h}_{\text{obs}})$$

・ 観測値の下での欠損値の事後分布を求める

$$p(\mathbf{h}_{loss} \mid \mathbf{h}_{obs}) = \mathcal{N}(\mathbf{h}_{loss} \mid \underline{\mu}_{loss|obs}, \ \Sigma_{loss|obs})$$

欠損値の期待値 
$$\mu_{\text{loss|obs}} = \mathbf{K}_{\theta \text{loss,obs}} \mathbf{K}_{\theta \text{obs,obs}}^{-1} \mathbf{h}_{\text{obs}}$$

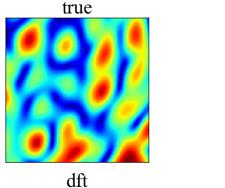
$$\mathbf{\Sigma}_{\text{loss|obs}} = \mathbf{K}_{\theta \text{loss,loss}} - \mathbf{K}_{\theta \text{loss,obs}} \mathbf{K}_{\theta \text{obs,obs}}^{-1} \mathbf{K}_{\theta \text{obs,loss}}$$

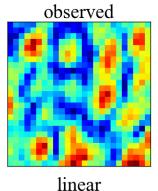


## 結果

• <u>周波数・時間変動チャネル</u>





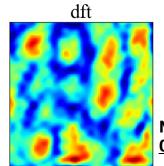


dft: DFT補間

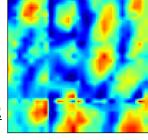
linear: 双線形補間 gp:ガウス過程回帰

#### シミュレーション条件

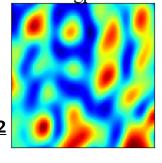
- 入力サイズ(観測): 25×25
- 出力サイズ(補間): 100×100
- 正規化ドップラー: 0.1, 0.2, ..., 0.5
- 正規化遅延時間: 0.1, 0.2, ..., 0.5
- SNR=20 dB
- RBFカーネル(最適化パラメータ数:3)







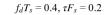


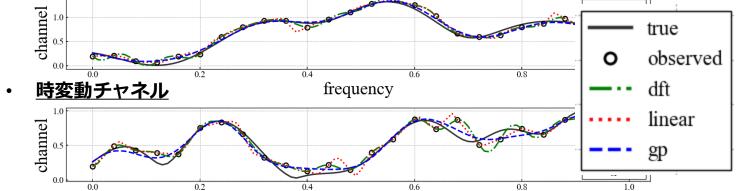


MSE: 0.00702 • 性能: linear < dft < gp

gpはdftと比較してMSEが約2/5倍

#### 周波数変動チャネル



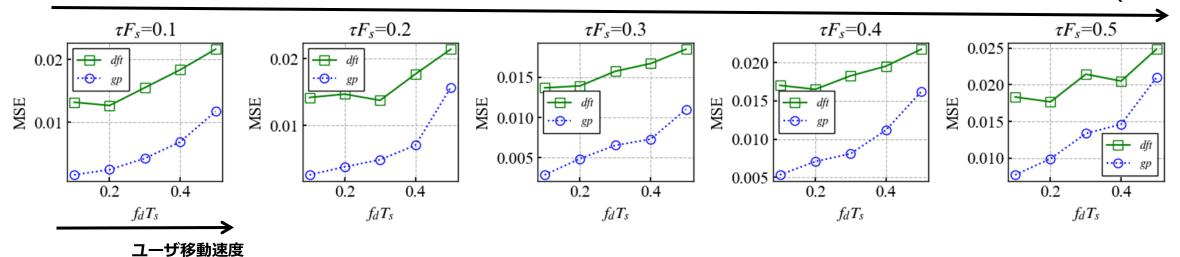


time

## 結果

・異なる5つの伝搬環境においてユーザ移動速度を変化させたときの評価

最大遅延時間 (周波数変動:大)



#### まとめ

- FdTs=0.4, tFs=0.2 の環境において, GPを利用することでDFT補間と比較してMSEが2/5倍に改善
- 異なる周波数,時間変動環境においてGPの有効性を確認
- 課題

(時間変動:大)

- SinGANを適用したが上手く補間できなかった
- 複素数での適用(今回は絶対値をとったデータに対して適用)
- リアルタイム動作の考慮

